これだけ　椛の湖農業小学校だより　No.128

どんびき

２０１０年3月9日　発行
発行者　椛の湖農業小学校

今年は「こどもの絵」

農小だより「どんびき」は絵も楽しみに待ってもらっている。

去年は山田七郎先生の後を継いで農小スタッフのミノちゃん(古井実)が得意の草花の絵を描いてくれたが、昨夏病に倒れ、今まだ闘病中である。

私たちの中では「どんびき会議」と呼んでいる事務局会議で話し合った結果、先年に農小に通っていただいたこともある、坂下の大橋寿美代先生にお願いすることになった。

美術の教諭であった先生は、障がい児教育にもたずさわられて、退職後の今も、障がい児者の活動の支援や学童保育に精力的に関わってみえる。

大橋先生の「こどもの絵」は、いつも小さいものや弱い者にたいする優しさにあふれ、生命をいとおしむ愛と力をもらっている。　（草）

3月授業日のご案内

●日程　　3月 28 日（日）
　受付　　9:00～ 9:30
　入学式　　9:30～11:00
　　グループ紹介
　　学校・農場の説明
　グループ活動　　11:00～12:00
　昼食　　12:00～13:30
　授業　　13:30～15:00
　　じゃがいも植え
　　ほうれん草・にんじんの種まき
　終わりの会　　15:00～15:20

●服　装　作業のできる服装

●持ち物　手袋、タオル、長靴、雨具、エプロン、食器（皿、汁用椀、湯のみ）箸

●昼食　　五平餅(グループ活動の中でみんなで作ります)・豚汁など

●返信はがき締め切り　3月 24 日（厳守）

●問い合わせ･緊急連絡　TEL 0573-75-4417 ・090-5110-9362（山内總太郎）

～とくちゃんの農小レポート～

課外授業（ものづくり教室）レポート

平成１７年度（１８年１月）から始めた課外授業も、年と共に参加者が増えてきました。
今年度は、予定した３回の課外授業に多くの申込みをしていただきました。

１２月には、大雪に見舞われ、待望の注連縄（しめなわ）作りが残念ながら中止となってしまいました。

１月は「和凧作り」に挑戦しましたが、風が弱くて高くまで揚げられませんでした。しかし、地元の人達が開催している左義長（どんど焼き）に参加させて頂きました。農小のために、ちょっと小型の左義長を新たに作ってもらい、昼間（地元では夜の行事）に点火して楽しみました。

２月には染め物を予定していましたが、講師の都合が悪く急きょ変更して、「和紙を利用しての染色」を行いましたが、なかなか個性的な作品が出来上がり満足のようでした。
午後は、１月に作った凧を揚げて見ましたが、今回は風に恵まれて、ほとんどの凧が、１００Ｍの糸一杯に延び大空を舞いました。
その後は郷土の銘菓「からすみ」作りを、地元の大山先生に手ほどき頂きながら行いました。「からすみ」は、米粉を利用した蒸し菓子で、昔からこの地方では４月のひな祭りに供えるものでした。試食は大変好評で、持ち帰りも沢山ありました。

参加者の中には、今年で卒業の方もあり、とても寂しい気がいたします。
機会があれば時々は訪れて欲しいと思っています。

～安保兄の百姓ばなし～

氷がとけると何になる

雪と氷の祭典、バンクーバー冬のオリンピックのテレビを見ていた時、ふと小学生のころを思い出した。
あぼ兄たちの子どもの頃の冬の遊びといえば、一番はスキー・そりとスケートだった。１・２月になると家の近くの農業用のため池が凍り、そこが我々のスケート場だった。
スケート靴などはもちろん無く、竹を半分に割り、鼻緒をすげただけのゲタスケートだったが、それがけっこう楽しかった。
もちろん、スキーもそりも、竹を割り火であぶって曲げた手づくりだった。
スキーとなれば、畑の斜面か人通りの少ない道路がゲレンデに変わる。通行人は片隅に砂をまいて遠慮しながら通ってくれたものだ。
学校帰りには、日暮れまでスキー・そりなどで遊び、お尻はビショビショで、家に帰ると同時にコタツに首までもぐり、時にはそのまま寝てしまったこともあった。

そんな昔を思い出した。

昭和３０年代になるとスケートが盛んになり、中津川市と恵那市の境にある保古の湖（標高９００m、周り５ｋm）に天然リンクが整備された。昭和３９年には国体予選の会場にもなった。その後は大きな競技会などはないにしても、１０年ぐらいは多くの人が山道を通ってスケートを楽しんだ。しかし、中津川の街の近くに人工のスケート場がオープンしてからは行く人もなくなってしまった。

近くは椛の湖（標高５００m）でも、昭和３０年代までは全面氷結しスケートをしている人を見かけたものだった。だが最近では、スケートなどできるどころか　氷も張らない。

これだけみても地球温暖化が進んでいることがわかる。

ヒマラヤの氷河がとけて、次から次へ氷河湖が決壊し大洪水になる。又南極の氷山がとけて海水の水位が上がり、島や海岸の町が沈んでしまうシュミレーション映像をみたことがある。

脅威のストーリーは現実のものとなりつつある。それもこのままいけばそんなに遠い将来ではないという。人類が知恵をだすときだ。

「氷がとけると洪水になる」では困るが、

農小の子どもたちは　それぞれの学校で「氷がとけると何になる」と問われたら、何と答えるのだろう。

ある学校でのこと「氷がとけたら何になる」というテストで、ある子が「水になる」ではなく「春になる」と答えたという話を、ある新聞がとりあげたことで話題になった。

冬の長い北国では、春を待つ思いをいろんな形で表現している。その北国の学校でも、テストでは「雪がとけると何になる」の問いに、『息子が「土が出てくる　春になる」と書いたらやっぱり×だった』という母親の投稿も紹介された。

学校のテストは×をもらっても、親としては「春になる」と考えたわが子の感性に〇をやりたいと思うのは、いずれも同じである。

あぼ兄は「氷がとけると忙しくなる」。

夢のない答えかもしれないが、２月下旬になると陽だまりには雑草たちが申し合わせたように芽吹き、畑ではもうネギ、タマネギなどは冬の姿とは見違えるほど生き生きと伸び始めている。

「氷がとけると草たちがおどりはじめる」

「氷がとけると農小のみなさん・お父さん・お母さんに会える」

第１７期入学のみなさん、楽しみにお待ちしています。

この顔があぼ兄です。

春を待つような顔ではありませんが、よろしく。